

れきしみち

安城市制施行



P2
特集

安城市制施行70周年記念企画展
安城太郎 満70歳 - 安城市のあゆみ -

P4 第11回松平シンポジウム報告 [2]

P6 連載「安城歴史散策
風を感じて歴史を歩く10」

P7 安城新発見
「新しくわかった市域の自由民権運動関係者 小笠原金平」

P8 安祥文化のさと会員の案内
市民ギャラリーよりお知らせ



2022.4
No.124

安城市
歴史博物館

Anjo city Museum of History

令和4年度

安祥文化のさと会員 大募集!

「さと会員」は、安祥文化のさとを楽しむための
“ファンクラブ”のようなものです。

展覧会をお得に何度も観たい。どんな催しがあるか知りたい。
歴史やアートをもっと身近に感じたい。などなど…
「さと会員」になって、安祥文化のさとをまるごと楽しんでみませんか。

歴史博物館や
市民ギャラリーの
最新情報を
お届け!

特典

入会について
会費:500円

- 1 安祥文化のさと(歴史博物館、市民ギャラリー、埋蔵文化財センターなど)の最新情報をお届け!
- 2 歴史博物館の常設展観覧料が年間通じて無料!
- 3 歴史博物館の有料展示観覧料が2割引!
- 4 ぶらす珈琲店のお食事・ドリンク500円分割引!
- 5 会員限定「さとスタンプラリー」にチャレンジ
スタンプ数に応じた景品をプレゼント!

[入会受付] 令和4年4月1日(金)～
[支払方法] 歴史博物館受付かお振込みの2通り。詳細はお問合せください。



安城市民ギャラリーよりお知らせ

懐かしの“車”写真 & 写真作品展



懐かしの“車”写真大会 & 写真撮影会の作品を
展示します。
(写真大会 & 写真撮影会は4月9日(土)に行います。)

[開催期間] 令和4年4月23日(土)～5月1日(日)
[休館日] 月曜日
[時間] 9:00～17:00
[会場] 市民ギャラリー展示室 D・E
[観覧料] 観覧無料

市民ギャラリー企画展
「成田満喜子展 人、色、模様」



本市を中心に活躍し、人物像を多く手掛けた
成田満喜子の色彩豊かな日本画の軌跡を
紹介します。

[開催期間] 令和4年6月25日(土)～7月9日(土)
[休館日] 月曜日
[時間] 9:00～17:00(入館は16:30まで)
[会場] 市民ギャラリー展示室 D・E
[観覧料] 観覧無料

安祥文化のさと

「安祥文化のさと」とは安城市にある松平氏四代50年の
居城跡を整備した安祥城址公園一帯の名称です

[全館共通事項]

住 所 / 〒446-0026 愛知県安城市安城町城堀30番地
休館日 / 毎週月曜日(祝日の場合は開館)、年末年始(12/28-1/4)

安城市歴史博物館 開館時間 / 9:00～17:00
TEL:0566-77-6655 FAX:0566-77-6600

安城市民ギャラリー 開館時間 / 9:00～17:00
TEL:0566-77-6853 FAX:0566-77-4491

安城市埋蔵文化財センター 開館時間 / 9:00～17:00
TEL:0566-77-4477 FAX:0566-77-6600

安祥公民館 開館時間 / 9:00～21:00
TEL:0566-77-5070 FAX:0566-77-6062

公式HP、SNSもご覧ください

安城市歴史博物館 <https://ansyobunka.jp/> [f](#) [i](#) [t](#)

安城太郎

満70歳

観覧無料

— 安城市のあゆみ —

令和4年
4月9日^(土)～6月26日^(日)

今年の五月五日、安城市は市制七〇周年を迎えます。今回は市制施行と同じ日に生まれた安城太郎という人物を通して見た、安城七〇年の足跡を展示します。この安城太郎は市域に住んでいる市民、市内で仕事に従事している人々も含めた人物であり、ある部分は安城市を擬人化したような人物です。
この太郎の人生の転換期を四つの時期に分けて紹介します。



1959年 市営大山田上団地の造成

太郎の生まれた頃（1952～1964）

太郎は一九五二（昭和二十七）年五月五日に誕生しました。第二次世界大戦が終結してから七年目を迎え、サンフランシスコ講和条約が締結され、日本が独立を果たし、戦後の混乱も落ち着いていました。しかしまだ、食糧事情は万全ではなく、配給や安城の農家では農作物の供出が続きました。

戦後は民主主義と共産主義の国々で二分され、冷戦の時代となり、日本の政治もその影響を受け、また、地方では新しい民主的な選挙、政治が行われました。

一九五五年の昭和の大合併によって、安城市は明治村や依佐美村の一部と合併しました。尾崎・柿崎



1952年 市制施行祝賀行事ポスター

など矢作町四地区は一時岡崎市になりましたが、一九六〇年になって安城市に編入されました。これらの合併で一番の騒動となったのは東端地区で、合併賛成派と反対派が運動を展開し、決着がつくまでに三年を要しました。

太郎が七歳になった一九五九年の秋、伊勢湾台風が当地に襲来しました。沿岸地域に比べて安城の被害は少なかったのですが、強風による作物被害が甚大でした。また、屋根の瓦が飛ばされ、家屋倒壊などの被害に見舞われ、太郎も夜中に怖い体験をしました。

この伊勢湾台風被害や合併による小中学校建設が過重となって市の財政が赤字となり、とうとう一九六〇年に安城市は地方財政再建団体となってしまいました。その同じ年に市は工場誘致条例を定めました。日本経済は岩戸景気の最中であり、交通流通の便が良



1959年 伊勢湾台風による被害

太郎の多感期（1965～1988）

この時期、今に続いている様々な始まりを見ることが出来ます。たとえば、盆踊りは市制施行と同じ一九五二年、安城七夕まつりは一九五四年、結婚式場は山崎領徳会館で一九五五年に始まりました。市内初の信号機設置は一九六二年、横断歩道橋は一九六四年です。当地の名産の安城梨ですが、観光の一つとして一九六二年から七四年の間、梨狩りが池浦町で行われていました。

そして、一九六三年には東海道新幹線が敷設、市域を横断しました。一九六四年十月十日、東京オリンピック開会式の様子はテレビ中継され、小学校から帰った太郎も釘付けになって見ていました。



1964年 東京オリンピック聖火リレー

ワナーなど自動車関連工場ができ、その後も工場が増え続けました。

しかしその反動として、公害や交通の問題なども目立ち始めました。また、非行問題も深刻になりました。太郎の住む安城の河川は油ヶ淵に注ぎ、油ヶ淵の水質汚濁は一九八〇年に全国でワースト三位に入り、その後も常にワースト上位で改善が遅れていました。そこで油ヶ淵に注ぐ河川の浄化に取り組み、鯉の放流をはじめ、太郎の周りでは下水道の敷設が進みました。安城の街中のどこかしら下水道管を通す工事が行われていました。安城市は下水道、上水道の普及を第一にし、ごみ対策とともに環境問題に取り組みました。

市域の景観もこの頃から大きく変わり始めました。一九七三年、市役所前にダイエーが開店し、その後、大型スーパーが進出し、太郎も物珍しさや品物の豊富さもあって、よく買い物に出かけました。

安城名産のイチジクは転作を契機に一九七一年頃からつくり始め、梨はそれまでの長十郎から豊水・幸水に変え始めたのが一九七九年頃からです。一九九〇年に安城で品種改良された愛甘水が初出荷されますが、豊水・幸水共に今でも高い人気が続いています。

太郎が成人式を迎えたのは一九七三年です。安城市で成人式が始まったのは、おそらく一九五七年と思われます。今の成人式は女性が着物姿で参加するのが当たり前となっていますが、はじめの頃は新生活運動が盛んで、その儉約の一つとして女性のスーツ着での参加が奨励されていました。

また、西三河での新幹線の新駅の誘致合戦が一九八二年に起き、翌々年



1961年の成人式

太郎の実年期（1989～2011）

長かった昭和が終わり、平成と元号が変わりました。この年には六月に中国で天安門事件、十一月には東西ドイツのベルリンの壁崩壊があり、日本では消費税が導入され、日米構造協議が開始されるなど、それまでの日本の常識が変化して行く兆しが見えてきました。

バブル景気は一九八六年から一九九一（平成三年）までで、その後長い不景気がつづきました。二〇〇八年にはアメリカでリーマン・ショックの金融危機が起き、日本の大幅な景気後退に繋がりました。

二〇〇〇年を境に制限されていた大型スーパーの進出が顕著となりました。何でも揃う大型スーパーは消費者である太郎からすると生活が豊かになったと感じましたが、駅前商店街はシャッター街と揶揄されるほど閉店するところが目立ち始めました。

太郎の周りでは、新たな時代を感じながら、その反面、社会不安が多くあった時期でした。一九九〇年代には湾岸戦争、雲仙普賢岳噴火、冷害と米の緊急輸入、地下鉄サリン事件、狂牛病、大腸菌〇一五七



新幹線新駅募金募集ポスター

に幸田町内の候補地等を押さえ、一九八八年三月十三日に三河安城駅は開業しました。

六〇歳になった太郎（2012～2022）

六〇歳になった太郎はまだまだ健在です。安城市は継続して女性問題や環境・福祉・防災・健康に力を注いでいます。それは安城の暮らしやすさにつながっています。加えて、安城市でも外国人在住者が増え、日本の労働力不足は太郎の周辺まで広がってきたと感じる今日このごろです。

大型スーパーの象徴であった太郎の近所のサンテラス安城が二〇一五年に閉店、二〇二〇（令和二年）にはザ・モール安城も閉店し、大型スーパーも去就が難しいことを感じました。コロナ禍によるネットショッピングが今後、安城の景観を変える要因となるかもしれません。



2020年に閉店したザ・モール安城店

安城の七〇年を「安城太郎」が精一杯紹介します。ぜひ歴史博物館へお越しください。

安城二代岡崎殿

安城松平家の異端児 清康<2>

令和三年(二〇二二)十月三十一日の日曜日、アンフォーレホールにおいて、第11回松平シンポジウム「安城二代岡崎殿―安城松平家の異端児 清康―」を開催しました。前刊の「れきしみち」二二三号では、三氏による基調報告の要旨をお伝えしましたが、今回は後半の討論部分の要旨をお伝えします。

コーディネーター(司会)を谷口央氏(東京都立大学教授)に代え、村岡幹生氏(中京大学名誉教授)、平野明夫氏(國學院大學講師)、山田邦明氏(愛知大学教授)、柳沢昌紀氏(中京大学教授)をパネリストとして討論が進められました。



清康の山中から岡崎入城まで

平野氏は報告の補足として、「清康が家督を継ぐ前年の大永二年(一五二二)五月のころ清康と岡崎松平の戦いがあった」ことを加えた。

村岡氏はそれに続けて、「その合戦による奉加帳(欠年月日)「松平一門・家臣奉加帳写」がおそらく大永三年に作成された。安城松平家と岡崎松平家との合戦の解決策のひとつとして、本来岡崎松平家の領地であった山中(岡崎市)に安城松平家出身の清康が入った。これをお膳立てしたのが『三河物語』の作者大久保忠教の先祖大久保氏で、大久保氏はそれ以前、岡崎松平家の家臣だったと思われる。当時、安城松平家においては清康の叔父信定が実力もあり安定しているというところで、後継者に据え



村岡幹生氏(中京大学名誉教授)

られた。信忠の息子清康はまだ若すぎため家督相続がすんなりと出来ない状況で、また安城松平家の家臣団の分裂の原因にもなる危険な要素であった。岡崎松平家にとっても、安城松平家からの人質なので、岡崎松平家は自己の領地内に清康を取り込み、清康の山中進出ができたのではないかと大胆に考えられるとした。

山田氏は、「清康が山中城を奪取して、そのあと岡崎を支配下にした順番で、清康は清孝と称していた段階ではむしろ山中あたりに拠点をもっている、そして『宗長手記』にある岡崎の「松平次郎三郎の家城也」と家城があったとする大永七年の段階には、あきらかに岡崎に住んでいたというストーリーが想定できる」とした。

三河以来の三譜代について村岡氏は、「安城譜代は清康以前の三代にわたる安城時代から仕えてきた譜代家臣をあらわすが、山中譜代は清康が山中に居た時期、ほんの二、三年しかないといういびつさがある。山中譜代がある理由は、大久保氏の先祖がこの時に清康を迎え入れて臣従した、それ以来松平氏を支えてきたんだという自負からくるものであり、そのような形で『三河物語』を読めば理解できる。さらに、先祖以来大久保氏で重視されていた伝承を『三河物語』の中に書き込んだオリジナ

ル性がみられ、守山崩れの記述のような、他所からの引用ではない」とした。谷口氏は、「家の中で使われる予定だった『三河物語』ならではないという風なところと繋がるのではないか。清康とその家臣団の作られ方、また清康の山中から岡崎への動きがここで少し確認できる部分があったのかなと感じる。まだまだ議論したいところでもある」とした。



コーディネーター
谷口央氏(東京都立大学教授)

姓・本名について

平野氏は、「松平が初期に称していたのは『賀茂氏』ではば間違いはない、代々いわゆる歴代当主は何を称していたかというと実際にはわからないが、清康はおそらく源を意識していたんだろうと思われる。世良田氏というのがいわゆる新田源氏の一族という事になるので、源を意識していた。付け加えると、たぶん家康も源をずっと意識していた。家康の叙爵の時には藤原になるが、領国内ではずっと源を使っていたのであるうと考えている。豊臣政権の中では豊臣を使うが、実際に関東の領国内を支配する上では源姓で、恐らくこれ

はほかの大名もそういう使い分けをしていたであろう。家康の意識の源、その意識の源泉は清康だろう」とした。

村岡氏は、「清康の名前は、もともと清孝で、孝の字は父親信忠の法名の泰孝によるもの。信忠の子は清孝、信孝、康孝とすべて孝をつけている。清康が二十歳の年齢位だと駆け引きができる状態になった段階であろう、清康が安城松平家の鬼子というのは、親のいない子供ということを表現したい」とした。

三河物語の清康像

谷口氏の「清康は若くして死んだのにも関わらず大忙しな人生であった。そのような記述の『三河物語』をどう考えたらいいか」との質問に対して村岡氏は、「やはり『松平記』の完全な盗用で、部分的に大久保家が関わった戦闘の部分だけは『松平記』の記事を修正している。しかし、『三河物語』の全体的な記事の構成は『松平記』を全部そのまま使われている」とした。

また山田氏は、「岩崎(日進市)・品野(瀬戸市)を占領し守山(名古屋守山区)と関係を持ったというのは、これは岩崎・品野を通らないと守山に行けない」とした。続けて、「この件は清康の業績ではなくて、もっと前、松平氏全体の業



山田邦明氏(愛知大学教授)

安城四代の名乗りと守山崩れについて

村岡氏は、「清康が『安城四代』(天文四年(一五三五)「大樹寺多宝塔心柱墨書銘写」)を名乗ったというのは、信定との間での同意があった。その契機は父信忠の死去(享禄四年(一五三一))であろう。改めて安城家の跡継ぎは誰なのかという事が問題となり、はつきり決めなければならない状況の中で、岡崎で成長、成功した清康に安城四代の名乗りを容認した。しかし安城城は信定のもの。安城松平家が尾張方面に築



柳沢昌紀氏(中京大学教授)

績で、どちらかというとき長忠とかの時代に守山を手に入れて、実際には桜井松平家の当主だった信定がそこに入ったと、そういうストーリーになる。守山を本拠地として保持していたのは信定であったと思われる。まったく『三河物語』のせいで清康の死は必要以上に貶められている」とした。

柳沢氏は、「『松平記』はとにかくこの守山崩れの時期から始まっていて、それ以前の記述は『松平記』にはない。村岡氏の考えでは何かあってもおかしくないとの事だが、今のところ清康の記述部分の元ネタのようなものは見つかっていない、というのが正直なところ」とした。

平野氏は全く違う風に考えているとして、「安城四代の名乗りは別に誰の許可も得ず、清康が自分勝手に言っている」と捉えている。守山が信定の居城だろうという事になると、やはり、守山を清康が攻めに行ったとしていい。守山攻めは、全国的に展開している『天文の内証』の一つと捉えている。天文年間(一五三二〜一五五五)、二四年間と長い、その中で北は伊達氏から南は島津氏まで天文期に内証がたくさん起り、その中の一つだろう」とした。

それに対し村岡氏は、「守山崩れを『三河物語』では非常にいやらしい陰謀家として描かれる信定の仕業としないうか、清康が正々堂々と戦を挑んで負けた、武将の筋を通したとどうして書かないのか、家臣に変な事で切り殺された情けない死に方で描かれている」と疑問を呈した。さらに、「武将の死を



平野明夫氏(國學院大學講師)

対して平野氏は、「清康死後に阿部大蔵が広忠を抱えて脱出したとも考えていない。信定が岡崎に入城したので、信定によって追放されたと考えられる。そのような状況で阿部大蔵がどういう形で関わっていたかは不明だが、追放先から広忠を脱出させたと考えられる。村岡氏とはストーリー自体が全く違う」とした。

谷口氏は、「本シンポジウム聴講者にとって、清康はやはり謎の人物ということが理解できたと思われる。今回は直接的な史料から、また三河全体のもしくは日本全体の流れの中から、さらには文学的な視点から討論を行った。しかし、まだまだ考察が必要である」とまとめた。

今回は令和五年二月初めに開催する予定です。論題は未定ですが、NHK大河ドラマ「どうする家康」に関連づけた内容にしたいと考えています。ご期待ください。

風を感じて歴史を歩く10 今池小学校区①

愛知紡績と工場専用線

愛知紡績安城工場（昭和二十三年設立）は、紡績業の斜陽化により昭和五十八年に閉鎖されますが、当時従業員五百人ほどのかなり大きな工場でした。愛知紡績の前身は、愛知航空機という飛行機の部品をつくる軍需工場でした。さらに、それ以前をたどると、この場所には、京都から誘致された辻紡績安城工場がありました。「農村都市」を

目標に掲げ、当時の安城町長の岡田菊次郎を始め多くの方が奔走して昭和九年に操業を開始しました。昭和十五年には、従業員七百人余の大工場でした。この辻紡績から愛知紡績までの時代の名残を示すものが二つあります。二つとも、西尾線に接続していた工場専用線についてのものです。一つめは、専用線が用水を渡るために建造された橋脚部分の遺構です。（写真①）



（写真①）工場専用線の橋脚遺構



場が安城町の発展に大きな影響を与えています。昭和十四年に誘致されたワシノ機械今村工場と昭和二十年の名古屋より疎開移転した牧田電機製作所です。紆余曲折があり、ワシノ機械の工場があった場所には大型スーパー、イトーヨーカドーが建ち、牧田電機製作所は電動工具のトップメーカー、株式会社マキタとして現在に至っています。散歩の道沿いにあるイノアック（昭和三十六年、井上護謄工業として操業）も長くこの地にある工場です。

板倉農場に関わる二つの石碑

明治用水中井筋に入る手前に形が違ふ二つの石碑（写真②）があります。一つはドイツ語で書かれた「日独青年友好記念、ヒトラーユーゲント視察記念碑」です。昭和十三年に来日したドイツの青少年団が農村見学を希望した際の一つに安城町が選ばれました。同年十月に、ユーゲント一行は、農事試験場や板倉農場を訪れています。

倉農場を訪れています。板倉農場とは板倉源太郎がたゆまぬ努力と工夫により、愛知県立農林学校の初代校長、山崎延吉が進めた多角形農業を実践し発展させた模範的な農場でした。源太郎は、米、麦を作り、スイカ、キャベツ等の野菜を栽培し、梨、柿等の果樹を植え付けるという経営の複式化を実践したり、豚を飼育し堆肥をつくり肥料の自給に努めたりしました。また、農事試験場の指導も受け農業技術の改良、研究を怠りませんでした。農業不況の中、多角形農業で安定した収入を得ていた板倉農場には多くの視察者が訪れました。もう一つの碑には「秩父宮両殿下御視察之處」とあります。昭和十二年に秩父宮同妃両殿下が視察に訪れた時の感動を源太郎は「板倉農場誌」に記しています。



写真② 板倉農場があった場所に立つ石碑

目の前に広がる風景は…

明治用水（中井筋）が地下を流れる自転車道を東に向かうと田園が広がります。この場所の字は上倉と言います。明治用水開通以前は、農業用水として重要な役割を担っていた上倉池のあった場所です。

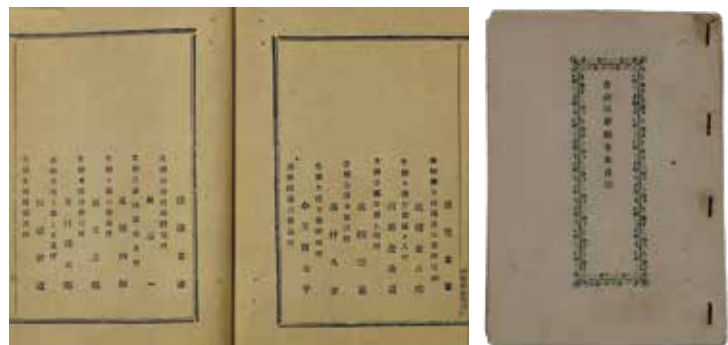
新しくわかった市域の自由民権運動関係者 小笠原金平

岡田洋司

安城新知見

筆者も執筆に加わっていた『新編安城市史3 通史編近代』（二〇〇八年）が刊行されてから十数年が過ぎ、新しく書き加えたいことも出てきました。碧海郡一帯は、重原藩大参事だった内藤魯一を中心にして自由民権運動が盛んな地域でした。『市史』でも、市域の自由民権運動関係者として城ヶ入村城泉寺の僧侶川那辺義道、福釜村の江川甚太郎、さらに和泉村出身の渋谷良平をあげておきました。ところがもう一人自由民権運動と接点を持つ人物がいました。二本木の小笠原金平という人物です。

自由党懇親会集員録



二本木町郷土史資料編編集委員会『二本木郷土史 資料編』（同委員会、一九八五年）によれば、小笠原金平は、安政六年（二八五八）の生まれ。父親の小笠原藤五郎は重原藩士でした。金平は重原藩の藩校養正館で漢学を学び、名古屋や大阪でも勉学を重ね、明治十三年（一八八〇）に小学校の教員となりました。その翌年、明治十四年（一八八一）六月十八日に岡崎で開かれた「愛知県尾三両国自由党懇談会」には、内藤魯

一をはじめ県内の六八人の自由民権運動賛同者が集まりました。その名簿（『自由党懇親会集員録』一八八一年、知立市歴史民俗資料館所蔵）のなかに小笠原金平の名があるのです。居住地は「野田村」となっています。野田村は、基本的に刈谷市域です。ところが、この場合の野田村とは、野田村の出郷である二本木のことでした。したがって小笠原は市域の自由民権運動関係者ということになります。それを指摘したのは市内の中学生内藤今日子さんです。内藤さんは、昨年十月に行われた「第16回安祥文化のさとまつり」のなかの「歴史のひろば展」で展示された「三河の自由民権運動」という研究で、そのことを発表しました。小笠原のことを見逃していたのは、『新編安城市史』の執筆者として汗顔の至りというほかありませんが、新しい事実が明らかになったことは喜ばしいことです。

とはいえ、小笠原とその後の自由民権運動のかかわりはよくわかりません。『二本木郷土史資料編』には小笠原が郡内各地の小学校教員（訓導・校長）をつとめたとありますが、自由民権運動との関係は書かれていません。今後の課題です。とくに若い研究者の皆さんがそのことに取り組むことを期待しています。

（新編西尾市史編集委員・元新編安城市史調査執筆委員）

安城市70周年生誕祭

5月5日(木・祝)13:30~



安城商店街アイドル「看板娘。」がお祝いに駆けつけてくれるよ!!

「3G ダブルカホンズ」HIDE和太鼓school「横遊〜SANGA〜」の公演もお楽しみに!



サルピーキーボー登場



3G ダブルカホンズ

HIDE和太鼓school「横遊〜SANGA〜」

開催中

安城市制施行70周年記念企画展

安城太郎 満70歳

-安城市のあゆみ- 観覧無料